

研究ノート

文書館と高校・大学連携

ーふくいヒストリア・学生サポータープログラムの実践からー

島田芳秀^{*1}・吉田将之^{*2}

はじめに

1. 文書館と高校・大学連携の位置づけ
2. 文書館・高校連携の実践例ーふくいヒストリアとふるさと探究プロジェクトー
3. 文書館・大学連携の実践例ー学生サポータープログラムー
4. 三者連携の実践例

おわりに

はじめに

県史編さん事業で培われた知を引き継ぎ、地域につたえられた貴重な資料を後世にのこす責務を持つ福井県文書館（以下、「文書館」と略）では、これまで、学校との連携を普及啓発事業の要に位置付け、所蔵する膨大な資料を活用し試行錯誤を重ねながら、効果的な学校連携の在り方を模索してきた。開館後7、8年を経て講座・展示のバリエーションが増えると、連携の手法にも幅が広がり、館自体の知名度の向上、親子連れや若い世代の来館者など、目に見えるかたちで普及啓発の効果があらわれてきた¹⁾。

ところがその反面、これまで行ってきた種々の企画は、ふだんの生活に全くなじみのない古文書資料をいかに面白く、とっつきやすく見せるかに重点をおくがゆえ、いずれもあたり障りのない、にぎやかな単発事業の域を出なかった。結局どの取組みにおいても、ふるさとの歴史や文書館の使い方といった肝心なところを児童・生徒の記憶に定着させられないまま、終わってしまうことが多かった。夏休みの自由研究や地域調べの宿題・レポートに、文書館を利用する児童・生徒がどれほど増えたのかと問われると、返答に苦しい状況である。もちろん、児童・生徒が楽しくふるさとの昔の資料にふれること自体は無意味ではないが、館に蓄積されたソース（資源）を活用して地域の歴史を学び、そこから得たことを外に向けて発信できる人材、ひいては10年・20年後の郷土史研究を担う人材（教育者）の育成に、館がどれほど貢献できているのかという疑問は常につきまとっていた。そうした点で、10歳前後の子どもだけでなく、ある程度の社会経験と言語スキル、歴史の知識を持ち、目的に即して必要な情報を収集・選択できる高校生・大学生へのアプローチが必要ではないかと考えるに至った。そこで、これまでの学校連携事業の路線を転換し、ふるさと離れ・歴史離れが危ぶまれている高校生

*1 福井県立武生高等学校教諭（元福井県文書館主任）

*2 福井県文書館主事

・大学生の地域学習を積極的にサポートし、その過程で文書館の利用価値に気付いてもらい、継続的な利用へとつなげていく方針をとることとした。そして今回、「福井県の歴史・文化を学び、ふるさとの魅力を全国に発信できる人材（生徒・学生）の育成」というコンセプトのもと、文書館と県内の高校・大学とが一定期間で複数回の企画を断続的に実施する、シリーズ型連携事業を新たにスタートさせた。

この事業は、高校および大学教育の特性に合わせ、それぞれがスタイルの全く異なるシリーズ構成となっている。また、明治・大正期の新聞資料（地元紙）を多数保管する当館の強みを生かし、NIE²⁾を意識した企画を試みたほか、時には併設の県立図書館、市立図書館など他機関の協力も仰ぎつつ、高校・大学の年間スケジュールと生徒・学生の状況をみながら、柔軟に進めていった。当館が実施したこの2つの連携事業について、具体的な中身は各章でふれることとし、ここでは概要を簡単に紹介するにとどめる。

まず文書館・高校連携では、2010年（平成22）度からこれまで幾度か関わりのあった福井県立武生高等学校（以下、「武生高校」と略）³⁾と共同で、福井県の歴史・文化に関連するパネル資料展示、資料紹介講座、教養講座からなる5回シリーズの連携事業「ふくいヒストリア」を実施した。2011年（平成23）度は「ふるさと探究プロジェクト」と銘打ち、高校生が主体となる活動へとマイナーチェンジをはかった。文書館・大学連携も、2010年から単年度事業として、全6回シリーズの「学生サポータープログラム」（以下、「学生プログラム」と略）をスタートさせ、2011年度も引き続き実施している。こちらは資料目録作成、講演会聴講、テーマ研究活動からなり、福井大学教育地域科学部の学生を対象とした連携事業である。そして、最終的には2つの同時並行したプロジェクトをさらに発展させ、文書館を基点に高校・大学間を新たに結びつける三者連携型の特別企画を実現させるに至った。

こうして2010年にスタートした高校・大学との連携事業は、現在2年目を終えようやくそのスタイルが確立できている段階である。とはいえ、ここまで「福井県の歴史・文化を学び、ふるさとの魅力を全国に発信できる生徒の育成」にばかり気持ちが先走りすぎていたがゆえに、そもそも文書館と高校・大学の連携の形にはどのようなスタイルがあり、意義があるのかという根本部分をあまり深く考えていなかった。そこで、いま一度両シリーズを概観し、各実践の検証を通して、目標にどれだけ近づくことができたのか、「協力」よりも「連携」をとることによって文書館・高校・大学それぞれにどんなメリットがあるかを明らかにし、次年度以降の連携事業にフィードバックさせることが必要となってくる。

そこでまず、文書館と高校・大学連携の根拠について、同じ資料保存機関である図書館・博物館を参考に法規面から確認することとし、他の事例を参考にその意義を考えてみたい。また、特に手間と時間をかけて展開してきたふくいヒストリア、ふるさと探究プロジェクトについては、高校側の視点を交えてふりかえることとし、学生プログラム、三者の連携により実現した特別企画とあわせて、各実践の概要を紹介する。最後に、当初の目標と照らし合わせ、2年間で浮かび上がった課題および改善点を整理しながら、望ましい連携事業について考察を試みたい。

1. 文書館と高校・大学連携の位置づけ

文化施設（文書館含む）が、高校・大学と連携した取り組みを行う場合、その根拠を法的にたどると学校側と文化施設側の両面から導かれる。まず学校側の立場からみると、例えば学習指導要領（社会、総合的な学習の時間）には、指導計画作成上の留意事項として、博物館や郷土資料館等の施設を活用することをうたう文言が明記されている⁴⁾。これは小学校に限らず、中学・高校の各段階でも同様であるが、もっと根本的なところでいえば、学校教育法においても社会教育関係団体、関係機関との連携が指摘されていることから⁵⁾、学校が自身の教育活動を達成するために学外の文化施設と連携を図ることに對し、法的根拠は十分に与えられている。

他方、文化施設の側から関係法令をとりあげてみる。文書館と類縁の文化施設として図書館・博物館を例にあげると、図書館法では「図書館奉仕」の1つとして学校教育への支援ないし協力がうたわれている⁶⁾。また博物館法では、「博物館事業」の中に、図書館と同様、学校への協力が明記されているどころか、2008年（平成20）の法改正で、地域の実情をふまえた学校教育への援助をうたう第2項をわざわざ設けている⁷⁾。よって図書館・博物館のいずれも学校との密な連絡、協力・援助といった文言が基幹業務に組み込まれているとみなすことができる。さらに図書館法における司書職員の任命条件には、3年以上の学校職に就いていること、公立図書館に限っては、図書館協議会の委員に学校関係者を含めることなども明記されている⁸⁾。

こうした規定からも、学校と文化施設の連携・協力は、関係法規によってはっきり定義されている。地域資料の収集保存・閲覧利用を主たる業務とする点では同様の文化施設である文書館の場合、学校教育との関わりについて図書館・博物館と同様に法的な意味づけが与えられているのかというと、残念ながらそういった規定は見当たらない。成立から20年を経過した公文書館法では⁹⁾、公文書など記録資料の一体的な保存管理が最優先され、広く学校教育、社会教育、生涯教育に果たすべき役割が定義されていない。もちろん、学校教育法、学習指導要領上の「文化施設」を文書館とよみかえることで、小・中・高校の各段階問わず、児童・生徒の学習の効果をあげるよう、例えば原本資料の公開や、ゲストティーチャーとして専門性の高い講話を施すことは可能である。ただし現時点で、文書館の学校教育連携の法的根拠を公文書館法に求めることは難しい。よって各自治体が施行する条例および施行規則にその根拠を求めなければならない。当館（福井県）の場合を見てみると、学術の振興および文化の向上（設置目的）¹⁰⁾、文書等に関する知識の普及および啓発（業務）¹¹⁾という表現にとどまり、先にあげた図書館法・博物館法ほど直接的に学校教育との連携にふみこんではない。公文書館法、条例ともども、行政文書や各種記録資料の収集・保存、閲覧利用を第一に想定しているため、資料そのものの取り扱いに重点が置かれ、収集・保存している資料を実際にどう活かすかということろまでは踏み込んでいない。そうは言えども、図書館・博物館と同様に歴史的資料を収集・保管する施設である以上、その資料がもつ歴史的価値を埋もれさせてもよいということにはならない。少なくとも法規面において、学校教育に限らず社会教育や生涯学習を含んだ広い意味で、文書館が果たすべき役割がより明確に付与されることが望まれる。

全国的にみると2009年（平成21）7月に公文書管理法が施行されたこともあり、文書館（公文書館）の存在が徐々に浸透していくなか、図書館や博物館と同様に、地域の記録資料を専門的に扱う強みを

生かして、積極的に学校連携に動いている文書館もみられる¹²⁾。

当館でも開館以後、親子連れの利用者や小・中学校のニーズに応えられるよう、夏休みの郷土新聞作りの支援や¹³⁾、明治・大正時代のすごろく複製シートを活用した出前授業などを展開し、小学校低学年から中学生を対象とした企画はある程度回を重ねてきている¹⁴⁾。もう少し上の年代に目を向けた場合、例えば高校では総合学習や歴史学習の場で、補助的な資料を提供し、学校図書館とのタイアップで歴史的教養を高める講座（講演）を行うといった事例がある。

また、大学との関係を考えて場合、一般的に文書館は調査研究・閲覧利用の場として、学生から教授に至るまで、おのおのが取り組む研究に必要な資料や情報を提供する。それを活用して大学は調査・研究の成果を文書館に還元することで、館に新たな知が蓄積される。または館が主催する講演会や、論文の寄稿というかたちをとることで、県民への還元となる。他にも共同で行う資料調査、県内の歴史研究の動向、資料の散逸状況に関する情報交換なども含めれば、文書館と大学は互いに持ちつ持たれつの関係とみて然るべきである。

そうした中、公文書管理法を起点に、今まで以上に国や地方公共団体で、公文書を主とした記録資料全般の一体的な収集・管理システムの整備が求められ、それに付随して専門的知識・技能を備えた職員の需要が全国的に高まっている。そうした専門職員としてのアーキビスト育成の観点から、新たな文書館・大学連携が芽生えてきている。一例として学習院大学人文科学研究科では、アーキビスト需要の高まりをふまえ、近い将来資格制度化されることをみこして、わが国初となる「アーカイブズ学専攻」を2008年（平成20）4月に新設した¹⁵⁾。このアーカイブズ専攻において、国立公文書館や国文学研究資料館は、アーキビストに必要な知識・技術の習得に協力している。また一部の国立大学内には文書館あるいは文書館機能をもつ施設が設けられ¹⁶⁾、それ以外にも大学図書館・資料館、大学史編纂の流れをうけたかたちで大学アーカイブズが整備されてきていることから、大学内のアーキビスト養成の環境は整いつつある。

このように、文書館でもようやく記録資料を専門的に扱うアーキビストの育成に携わる局面に入っている。文書館と大学間の連携を、こうした資格取得・専門職員の育成の面から見れば、この流れは今後さらに拡大していくように思われる。ただし地方における、大学と自治体アーカイブズとのつながりや、大学において文書館がこれまで担ってきた役割については、あまりはっきりしていない。特にグローバル化が進む現在、激しい国際間競争に対応しうる人材の育成が急務として、小学校での外国語（英語教育）の必修化や理数教育の標準時間数の増加など¹⁷⁾、学校教育においては国際化への対応と科学技術教育にベクトルが向けられて久しい。

そうした潮流の中、国・地域に焦点をあて、古い文献をたよりに過去の事象をたどり、現代社会と照らし合わせて考える歴史学習は、日を追うごとに英語・理数教育の影に隠れてしまう。だからこそ、将来の進路選択をひかえる高校生・大学生に対し、自身の生まれ育った地域の歴史・文化に身近にふれることができる機会を新たに設けることが必要となる。これをただ外から要求するのではなく、歴史を後世に伝える責務を負う機関として、文書館・博物館など公共の文化施設が各教育機関に働きかけながら、先陣を切って動いていく必要がある。

2. 文書館・高校連携の実践例ーふくいヒストリアとふるさと探究プロジェクトー

(1) ふくいヒストリアとは

福井県では、「福井県民の将来ビジョン」を策定し¹⁸⁾、子どもが質の高い文化にふれることができる機会の充実や、身近に文化を感じる環境作り、文化を生かした町づくりを推進している。そのため、教育現場と県内の文化施設が連携し、ふるさとふくいの文化を体験できる教育が進められている。しかし、それらは県の施設が主体となる一過性の単独事業に陥りやすく、子どもの学ぶ意欲を高め、生涯にわたり主体的に学び続ける生涯学習へとつながるほどの推進力が不足している。そこで、日常的に福井県の歴史・文化にふる機会を設け、いずれふるさとの魅力を全国に発信できるような若い世代の育成の一助になればということで、文書館とタイアップしたシリーズ型連携事業「ふくいヒストリア」を行うこととした。

2010年度のふくいヒストリアは「ランチタイムヒストリア」と「ふるさとヒストリア」という2つのスタイルで構成した。前者のランチタイムヒストリアでは、生徒が身構えることなく福井県の歴史に対する興味関心を高められるよう、昼食時間に学校食堂の空きスペースを利用し、普段の生活にとけこむかたちで県の歴史に関する様々な資料展示や、文書館職員の展示説明会を実施した。また、後者のふるさとヒストリアでは、高校生対象の古文書入門講座やインターネットを利用した歴史資料の検索講座、遠足での貴重資料見学、研究発表会からなり、生徒が学校の内外で行われる様々な活動を通じて、歴史の面白さ・奥深さを体験できるようにした¹⁹⁾。

(2) 実施上の問題点と解決策

ふくいヒストリアを実施する上で問題となったのは、多忙化する学校現場で継続的に実施するにはどこを主体として動くのが適当か、である。そこで高校側の受け皿として浮上したのが学校図書館である。学校図書館法によれば、読書活動の啓発にかかわること以外にも、資料展示会等を行うこと、他機関との連携・協力が明記されており、今回の連携の受け皿となる根拠がここに示されている²⁰⁾。そこで、活動の中心を資料展示会や研究会にあてることで、学校図書館を主体に連携シリーズを組み立てることとした。高校側のメリットとしては、単にその場のみの「協力」を依頼するのではなく、文書館と「連携」することで、資料借用や展示にかかわる申請手続き等、業務の事務量が減り、学校現場の更なる多忙化が抑えられる。同時に、県の歴史、地域資料の所在、資料保存のノウハウといったことについても、専門的なアドバイスを提供してもらうことができる。文書館では2009年度から学校を中心に巡回展示が本格化し²¹⁾、文書館と併設する福井県立図書館（以下、「県立図書館」と略）でも、福井県高等学校学校活動紹介展「ハイスクール・マイスクール」を実施しており²²⁾、こうした流れも連携へのハードルを低くする要因となった。

(3) 2010年度 文書館・武生高校連携企画「ふくいヒストリア」実践報告

①第1回「むかしの新聞あれこれ」(パネル展示)

・日時 平成22年9月3日(金)～9月10日(金) 場所:武生高校食堂

・展示説明会 日時:平成22年9月4日13:00～13:30(学校祭2日目) 担当:文書館 吉田将之

・主な展示資料 約50点の資料をA2～A4サイズのパネルにして展示。

年代	資料名	備考
幕末期	松平春嶽肖像／国立国会図書館蔵	春嶽の正装（和式）姿の肖像
幕末期	官板バタビア新聞／松平文庫（福井県立図書館保管）	日本語で出された最初の新聞
幕末期	万国新聞紙／松平文庫（福井県立図書館保管）	英国人ペリーが横浜で発行
1868年	横浜新報もしほ草／松平文庫（県立図書館保管）	米国人ヴァンリードが岸田吟香と共同で横浜居留地から発行。
1872年	撮要新聞／福井県立図書館蔵	県内新聞第1号
明治中 ～後期	新聞漫画（時事新報）／飯田広助家文書（N0055）	時事新報に掲載された世相を表す漫画
明治中 ～後期	新聞広告（時事新報、福井福井新聞ほか） ／飯田家文書、小泉家文書（福井県立図書館保管）	旧武生町（現越前市）、福井市内の店舗をふくむ新聞広告
1935年	広告すごろく（福壽繁栄すご六、繁昌商店双六） ／福井県立歴史博物館蔵	旧今立町栗田部地区（現越前市）、旧武生町内の店舗をすごろく形式で紹介

ふくいヒストリアの第一弾として、幕末のペリー来航の際、情報収集のために松平春嶽によって横浜で収集された新聞や、県内に残る世相を風刺した新聞漫画、新聞の付録として配付された武生町や今立町（いずれも現越前市）の商店を紹介する広告すごろく、明治時代の新聞の広告など約50点のパネルを展示した。学校祭期間中に実施したこともあり、来校した多くの保護者や卒業生が見学に訪れた。また、文書館職員による展示説明会もあわせて行い、この連携事業を多くの人に知ってもらおう機会となった。



写真1 展示説明会の様子(武生高校食堂)

・生徒の主な感想

- 私は昔の新聞を見たことがなかったので、今回のふくいヒストリアはとても新鮮でした。教科書を見れば歴史の大まかな流れは理解できるけれど、新聞だとより地方や人に近づいた身近な歴史を知ることができました。
- 私は今まで新聞を読むことに興味はありましたが、ふくいヒストリアで新聞そのものに興味を持てるようになりました。機会があれば外国の新聞の歴史についても調べてみたいと思いました。
- 今回の展示説明会で自分が福井のことを何も知らないと感じた。福井ってどんな所と聞かれたときに、すぐに答えられない自分がとても恥ずかしく思いました。福井のことを知ることができとても有意義であったと思います。

②第2回「インターネットを利用した郷土資料の活用法」(教養講座)

- ・日時 平成22年9月29日(水) 11:40～12:30 (4限目)
- ・場所 福井県立武生高等学校 パソコン室
- ・講師 文書館 吉田将之、武生高校 島田芳秀
- ・対象 3年6組生徒 38名(文系日本史クラス)

・本時の流れ パワーポイントおよび Web 画面で進行する。

	本時の流れ	準備物
0分	はじめに あいさつ、本時の流れを確認	配布用テキスト
5分	県文書館からの挑戦状 福井県の歴史に関するクイズを3問出題 ・朝倉の花押はどれ？ ・これは何が書いてある？（最古の三行半）	パソコン（講師、インターネット接続） プロジェクター、スクリーン、マイク
10分	クイズの回答をインターネットから探る 県文書館データベース ・デジタル歴史情報 ・古文書・写真・新聞検索 県立図書館データベース ・貴重資料 レファレンス結果 県外の役に立つホームページ紹介 ・国立公文書館アジア歴史資料センター ・近代デジタルライブラリー ・早稲田大学アーカイブズなど	パソコン（生徒、インターネット接続）
40分	検索で見られる原本資料を見てみよう。 ・朝倉の花押 ・浄瑠璃本 ・三行半 ・昭和初期の新聞（福井新聞、時事新報）	原本資料（文書館所蔵の朝倉義景書状、現存する最古の三行半、天下一本の浄瑠璃本など）
50分	おわりに まとめ、原本資料紹介	フェルト（黒） 白手袋

ふくいヒストリアの第2回目として、「インターネットを利用した郷土資料の活用法」を実施した。パソコンを用いたインターネット経由でのデータベース検索を利用し、県の歴史や地域の変遷を調べるうえでの基本となる情報の閲覧方法や、参考となる郷土資料の活用法を紹介した。パソコンの扱いに慣れている生徒に郷土の歴史に対する興味・関心を喚起するため、授業では文書館ホームページの資料データベースを利用し²³⁾、実際に画面上で資料の検索、閲覧の流れを体験させた。また、県立図書館ホームページのデジタルライブラリー²⁴⁾、国立公文書館アジア歴史資料センターホームページ²⁵⁾といった資料の検索・閲覧に有用なWebサイトも合わせて紹介し、生徒は近世に描かれた絵図や近代に作成された地図の高解像度のイメージを画面上で拡大して閲覧する流れを体験した。また、講座のほとんどがインターネット上の説明に終始してしまうため、学習した内容に現実味を持たせるべく、文書館データベースに登録され、複製本で閲覧できる資料の一部を原本の状態で紹介した。

・生徒の主な感想

○パソコンを使った資料調べは、予想をしなかったほどたくさんの鮮明な資料を簡単に見つけることができ本当に驚きました。また普段見ることができない資料の数々を生で目の前で見られて本当に感動しました。このような資料が残っていることは大事なことだと思うので、ずっと大切に保管してもらいたいです。

○福井は好きだけど他県に誇れるものはあまりないと思っていましたが、授業を受けて福井に誇りが持てさらに好きになりました。

○朝倉氏や柴田氏の花押や書状を見て本当に素晴らしいと思いました。実際の資料を見ることで教科書や先生の話から間接的に接していただけの世界が自分と直接つながった気がしました。歴史を肌で感じられた1時間でした。

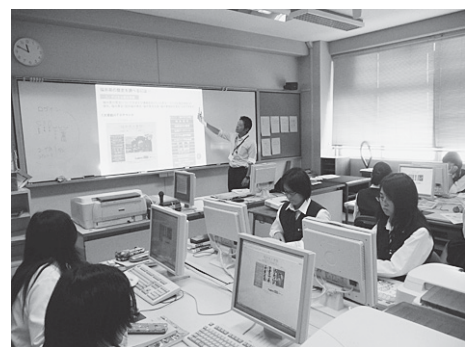


写真2 授業の様子(武生高校パソコン室)

○授業を受けてもっと有意義にインターネットを使えるのではないかと感じました。研究なんて大それたものではなくても、文書館のホームページにアクセスしたいです。

③第3回「文書館・図書館のお宝紹介～古文書・新聞を見てみよう～」(資料見学)

- ・日時 平成22年10月22日(金) 9:00～9:30
- ・場所 福井県文書館閲覧室、研修室
- ・対象 3年7組生徒 37名(文系クラス)
- ・担当 県立図書館 山川正幸 文書館 井上由紀恵、吉田将之
- ・当日の流れ

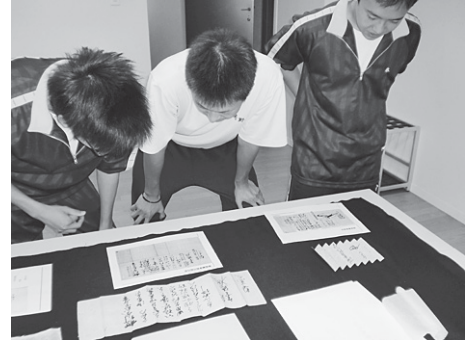


写真3 資料見学の様子(文書館閲覧室)

- 9:00 文書館到着、白川文字の室見学
 本県出身の漢字・文字研究者で、文化 勲章受章者である故・白川静氏の功績や漢字の歴史、成り立ちを学習。
- 9:10 文書館展示室見学
 月替展示「庶民の教養～読・書・算から広がる世界～」の紹介、公文書や古文書の保存や収集について職員が説明。
- 9:20 文書館所蔵資料見学
 県立図書館所蔵「解体新書」や文書館所蔵の明治の新聞など、原本資料について説明を受けながら見学。
- 9:30 見学終了 野外体験活動のため石川県小松市のふれあい健康広場へ移動。
- ・主な見学資料

年代	展示資料	備考
1570年(元亀元)	朝倉義景感状	姉川の戦いで家臣に与えた感状
1577年(天正5)	柴田勝家知行宛行状	柴田勝家が家臣に与えた知行宛行状
1686年(貞享3)	去状之事(離縁状)	国内最古とされている離縁状
1774年(安永2)	解体新書	小浜藩医杉田玄白の著書
1826年(文政9)	差上申口書証文一札之事(傘連判状)	百姓一揆の連判状
1868年(明治2)	五榜の揭示(高札)	庶民に出された高札
1894年(明治27)	日清戦争絵報	日清戦争を取材した新聞

高等学校学習指導要領解説特別活動編では、学校行事について、社会教育施設などを積極的に活用し、自然や文化にふれられるよう配慮すべき、と記載がある²⁶⁾。そこで武生高校では、遠足を地域の社会教育施設に出向いて文化に触れる機会と位置づけ、文書館や県立図書館の展示見学会を計画した。文書館では職員から公文書・古文書の保存についての説明をうけ、所蔵する貴重な資料の原本見学を行い、県立図書館では漢字学習の基礎として全県的に推進している白川文字学²⁷⁾の紹介スペースを見学した。こうしてふるさとにもゆかりのある記録資料や漢字文化にふれることができ、普段の授業では得がたい体験ができた。

④第4回「古文書入門講座～古文書で謎解き」(教養講座)

- ・日時 平成22年11月5日(金) 16:40～17:40
- ・会場 武生高校3階 第1視聴覚室
- ・対象 武生高校生徒、教職員 50名
- ・担当 古文書講座:武生高校 島田芳秀
ワンポイント資料紹介:文書館 吉田将之
- ・内容 (1) 明治時代の教科書を読んでみよう。
(2) 江戸時代の謎かけをしてみよう。
(3) 医学書を読んでみよう。
(4) 江戸時代の奇術を体験しよう。
(5) 和算に挑戦してみよう。
(6) ワンポイント資料紹介

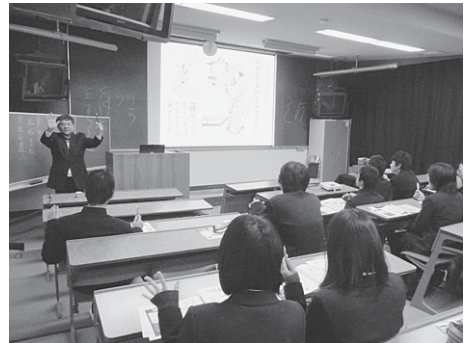


写真4 古文書入門講座の様子
(武生高校視聴覚室)

第4回では高校生対象の「古文書初級入門講座」を開催し、これまで一度も古文書を見たことがない生徒が古文書の読みに挑戦し、近世のくずし字や、当時の庶民の学問についての理解を深めた。さらに講座終了後、文書館職員によるワンポイント資料紹介が行われ、本講座のテキストで使用した和算本や謎かけ本の原本が紹介された。なお、講座は図書委員会主催の教養講座として実施した関係上、テキストの印刷・製本や会場設営など準備にかかる一連の作業は、図書委員の生徒を中心に行った。

・生徒の主な感想

- 私は今まで、昔の文学や文字のことはあまり興味がありませんでしたが、この講座を聞いて、興味がわいてきました。特に、謎かけや和算など、今でもあるようなことが昔からあるということに気付くことができよかったです。また機会があったら古典や昔のことなどを学びたいと思いました。
- 今日の講義を受けて、将来自分が大学などで古文書を研究する際に、とても役立つなと思いました。また、私は古典が好きなので、今回の講座はとてもおもしろかったです。
- 今日の古文書講座はとてもよかったです。おもしろかったですし、役に立つような知識も増えたのでよかったです。古文書を読み解いたり、昔の謎かけをすることで、昔の生活を知ることができました。将来の進路選択にも役立つと思いました。

⑤第5回「2月7日は何の日 ふるさと越前市・鯖江市」(パネル展示)

- ・日時 平成23年2月7日(月)～2月23日(水)
- ・会場 武生高校食堂
- ・内容 武生高校に関する明治から昭和にかけての新聞記事や越前市・鯖江市の町並みを表す写真など約60点を展示。

現在の福井県が誕生した2月7日の「ふるさとの日」にちなみ、武生高校の所在する越前市と隣の鯖江市の、明治・大正・昭和の各時代を古地図・古写真でふりかえる展示を行った。



写真5 パネル展示の様子
(武生高校食堂)

また、このパネル展示では同時進行の「学生サポータープログラム」とも一部からませる試みを入れた。文書館の資料検索実習で文書館データベースの活用法を学んだ福井大学の学生に、明治から昭和にかけて越前市・鯖江市および武生高校でおこった主な出来事を、新聞記事検索でピックアップしてもらい、「福大生が選んだ10大トピック」と題してパネル展示した。

(4) 「ふくいヒストリア」から「ふるさと探究プロジェクト」への取り組み

こうして2010年9月から5回シリーズで展開していったふくいヒストリアに対して、生徒からの感想はおおむね良好であったが、一方で課題もみえた。それは、5回の活動がいずれも職員と教員からの働きかけで動いていくもので、生徒の主体的な活動が入っていなかった点である。この点をふまえ、2011年度は生徒主体で活動を進めていけるよう、図書委員会に主体を移し、所属する生徒を組織化することから着手した。生徒自身が課題解決の過程で自ら学び考える資質の向上をはかる学習指導要領のねらいもふまえ、年度を通じての新たな取り組みとして、県内の歴史に関するテーマ（課題）を設定し調査・研究に取り組む「ふるさと探究プロジェクト」を立ち上げた。さらに、豊富な資料データをそなえる文書館と、多様な授業実践の蓄積をもつ武生高校が、それぞれの持ち味を生かし、県内の小・中・高校に赴いて共同で出前授業を行い、その過程でふるさと探究プロジェクトの活動を、多くの生徒・教職員に紹介することとした。

①2010年から2011年度にかけての文書館・高校連携の変化

・項目別対照表

	2010年度	2011年度
シリーズ	ふくいヒストリア	→ ふくいヒストリア 「ふるさと探究プロジェクト」
形式	文書館・県立図書館・武生高校の連携	→ 文書館・武生高校・福井大学の連携
企画	単発5回シリーズ 大学との連携企画	→ テーマ研究調査、パネル展示、 大学との連携企画1回
主体	図書広報部教諭・文書館職員	→ 武生高校図書委員会の生徒
内容	パネル展示、展示説明会	→ パネル展示（規模縮小）
	教養講座	→ （県内小・中・高校での出前授業）
	施設見学・資料公開（秋遠足希望クラス）	→ 施設見学・資料公開（秋遠足 希望クラス）
	テーマ別研究発表会	→ テーマ別研究発表展示・ 報告会（ポスターセッション）
期間	9月～2月	→ 4月～3月
場所	武生高校・文書館（図書館）	→ 武生高校、文書館（図書館）、市立図書館
文書館	企画運営、広報（各種メディア）、 資料提供、講師派遣	→ 資料提供（パネル・複製等）、活動支援、 連絡調整、広報（各種メディア）

・年間スケジュール対照表

	ふるさと探求	ふるさとNIE	ふるさとヒス
4月	テーマ研究 (福井震災)	新聞記事 収集・調査	
5月			
6月			㊦ パネル掲示1
7月			㊦ パネル掲示2
8月	㊧資料見学 聞き取り調査		
9月	㊦ふくいヒストリア①パネル展示 ㊦ふくいヒストリア②資料検索講座	㊦学校祭発表	㊧ミニ展示 「活動しようかい」
10月	㊧ふくいヒストリア③施設見学	武生高校新聞 ・ポスターセッション準備	㊦ パネル掲示3
11月	㊦ふくいヒストリア④教養講座		
12月	(㊦越前市・鯖江市テーマ研究)		
1月			
2月	㊦ふくいヒストリア⑤パネル展示 ※高大連携企画 テーマ研究発表会		㊧ミニ展示 「活動しようかい」
3月		※高大連携 ポスターセッション	

②「ふるさと探究プロジェクト」の組織

武生高校の学校図書館には生徒の図書委員会と教員の図書広報部がある。これまでは、図書の貸出業務が主な活動であったが、この図書委員会に新たなふるさと探究プロジェクトに即したグループを組織した。部活動や同好会として組織することも不可能ではないが、ふるさと歴史研究(同好)会などでは、部員がいなくなった時点で活動が終わってしまう。その点、図書委員会には1年生から3年生まで各クラス2名、計54名の生徒が所属している。毎年、新しい生徒が入るので継続性も担保できる。

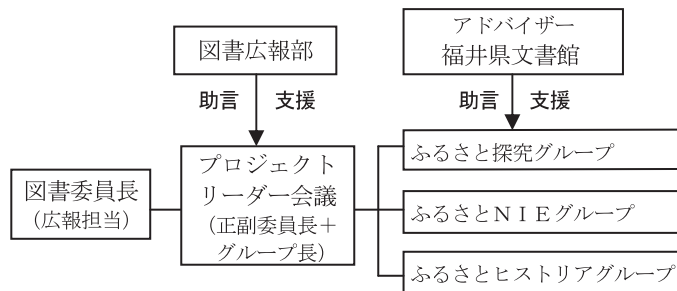


図1 ふるさと探究プロジェクトの組織図

こういった内情も勘案し、図書委員会のもとにふるさと探究プロジェクトを遂行する3つのグループを作った(図1)。県の歴史や文化について課題を設定し探究していく「ふるさと探究グループ」、学校で購読している新聞の中から県の歴史や文化にまつわる記事を整理・保存する「ふるさとNIEグループ」、文書館からも資料提供を受け、地域の歴史をふりかえるパネルを制作・掲示する「ふるさとヒストリアグループ」である。ふるさと探究グループが研究し、ふるさとNIEグループが資料を収集・整理し、ふるさと探究グループに提供する。研究成果は、ふるさとヒストリアグループが展示する。そして、各グループのリーダーと図書委員長が「プロジェクトリーダー会議」を開き調査・研究の方針や進め方について、生徒自身で考えを出し合いながら決定する。しかし、上記のようなグループを組織し活動するうえで問題となったのは、1・2年生においては部活動、3年生では受験勉強との兼ね合いである。活動の大半は平日の放課後や夏休み期間が中心となるため、部活動や受験勉強と重なってしまう。そこで、プロジェクトの主たる役割を1・2年生が担うこととし、特に最前線

に立って調査・研究および広報活動に取り組むふるさと探究グループには、部活動未加入者や文化部所属の生徒を中心に編成した。運動部所属の生徒は比較的時間の制約が少ない他の2つのグループに所属させることにした。その後、図書委員以外にも参加したいという生徒がいたので、全校生徒に公募することになったが、各部活動、3年学年会、進路指導部との調整を経て何とか生徒主体の組織が整った。なお文書館はアドバイザーとして、生徒主体で進められる調査・研究の助言と、求めに応じて資料提供を行うことでプロジェクト全体をサポートする側に回った。

③2011年度 文書館・武生高校連携企画「ふるさと探究プロジェクト」実践報告

- ・研究発表テーマ 「震災と復興」
- ・日時 平成23年9月3日(土) 11時00分～12時00分
- ・会場 武生高校3階 第1視聴覚室
- ・対象 武生高校生徒、教職員 卒業生 60名
- ・発表者 武生高校図書委員(ふるさと探究グループ) 8名
- ・発表内容 文書館の資料から見た福井震災の被害状況
武生高校新聞震災特集号からわかる復興ボランティア活動
福井震災からどのように復興したか
東日本大震災への提言

召集されたプロジェクトリーダー会議では、2011年度の研究テーマとして、1948年(昭和23)の福井震災をとりあげ、「震災と復興」とすることに決定した。これは3月に東日本大震災がおこったことや、5月にふるさと探究グループの生徒が学校図書館の書庫を調査したところ、「武生高校新聞福井震災特集号」を発見したことが背景にある²⁸⁾。そこで生徒たちは武生高校OB会に協力を仰ぎ、夏休みを使って罹災者の方々への聞き取り調査を行なった。また文書館へも調査に訪れ、福井震災による各地の被害状況をつたえる新聞・写真資料²⁹⁾、その後の復興過程を知ることができる公文書³⁰⁾を閲覧した。

学校祭ではふるさと探究グループの生徒が、「震災と復興」をテーマに研究発表を行い、福井震災の被害状況や当時の社会情勢、短期間で復興した理由、震災の聞き取り調査でわかったことを報告した。さらに、一連の探究活動を通して、生徒自身が考えた東日本大震災への提言を行い、復興には今後も継続的な支援が必要であると訴えた。またふるさとヒストリアグループの生徒は発表に先がけて、文書館より提供をうけた福井震災直後の様子をつたえる写真パネルを展示した。



写真6 研究発表の様子(武生高校)

・生徒の主な感想

- 福井震災の発表は、現在大きな問題になっている東日本大震災にも関連しているいいテーマだと思いました。福井震災が予想より早く復興できたのは、素早い支援やたくさんの方々のボランティアのおかげであると知ったとき、人と人のつながりが大切なのだと思います。

○私は福井震災について知りませんでしたが、図書委員会の研究発表で大きな震災であったと知り驚きました。福井震災の時に支援してくれた東北の人たちに、今度は私たちが支援する番だと思いました。

○福井震災の様子を知って、ちょっと息を飲みました。発表者から震災から立ち直れたのは他の人たちの助けがあったからと知っているのを聞き、なるほどと納得すると同時に、東日本大震災もみんなの助けが必要なんだろうと思った。自分は福井に住んでいるから東北のことは関係ないと思わないで、日本全体で東北を復興していかなければならないと思った。

(5) 2年間の取り組みをふりかえって

新しい学習指導要領では、「生きる力」をはぐくむことを目指し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うために、言語活動を充実するとしている。さらに知識基盤社会の到来や、グローバル化の進展など急速に社会が変化する中、次代を担う子どもたちには、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断することや、他者と切磋琢磨しつつ異なる文化や歴史に立脚する人々との共存を図ることなど、変化に対応する能力や資質が一層求められている³¹⁾。

これまで2年間にわたり文書館と武生高校が連携してきたが、研究活動を行ってきた生徒からは「自分で課題を見つけ調査・研究し発表していくことの楽しさが分かった。」「人前でプレゼンテーションを行う自信がついた。」という声が聞かれた。生徒が1つのテーマについて真剣に討論している姿を見ると、着実に成長し生きる力が養われているように実感できる。

また、生徒を取り巻く環境に目を向けると、グローバル社会への対応と同時に地域社会への回帰がさげばれている。隣県の滋賀県彦根市を例にすれば、彦根城を中心とする歴史的遺産が多くの消費活動を生み、疲弊する地域を再生する起爆剤となっている。また昨今の歴史ブームを背景に、ゲームやアニメといった新しい分野を巻き込みつつ歴史と観光が一体化した地域経済再生の流れがうまれている。こうした流れをうまく取り込みながら、子どもの歴史に対する興味・関心を高め、急速に変化する社会に対応する能力をはぐくむことも検討していかなければならない。

3. 文書館・大学連携の実践例ー学生サポータープログラムー

文書館の利用者は先祖調べを目的に来られる地域の年配者や、図書館で本を借りたついでに立ち寄られる方、資料の閲覧や調査に来る学生（大学院生含む、以下同）、大学の先生など幅広い。ただしここで付け加えるならば、学生については、県外の歴史系学科（専攻）に在籍している場合が圧倒的に多く、地元大学生の利用は極端に少ない。利用がないことは、すなわち交流が生まれにくいということでもあり、文書館と県内の大学、特に学生との交流の少なさは、長らく館の抱える懸案事項であった。その理由ははっきりしており、福井県の場合、高校生が、わが国あるいは生まれ育った県・市町村の歴史に興味・関心をもったとしても、その受け皿となる歴史系の専門学科をもつ大学は存在しない。また、文書館が受け皿となって専門職員（アーキビスト）を育成する方面から大学連携をはかることも、県内各大学の学部学科を見渡す限り事実上不可能である。

こうした背景をふまえ、大学と文書館が「県の歴史・文化を学び、ふるさとの魅力を全国に発信で

きる若い世代の育成」という共通の目標を掲げた場合、こういったアプローチで地元の学生に文書館が地域調べに有用な施設として認知してもらうか、という課題がある。本来ならば、地域資料の集積、資料保存、公文書管理と情報公開など、他の文化施設にはない専門性を活かした教養講座や、ワークショップ形式の体験講座を行うのが一般的である。しかし、こうした連携のあり方では上記の目標はとうてい成しえない。

このように地元の学生にもっと文書館を活用してほしいと望む一方、それに対するアプローチが見えないジレンマが続くなかで、かねてからこうした学生利用の現状と、文書館と大学連携のあり方について相談していた福井大学教育地域科学部・木村教授³²⁾より、一つの道筋として、学校教育、教員養成を想定した連携の可能性を示していただいた。将来社会科教員として教壇に立つことを想定するならば、教科指導を行う上で必要な最低限の知識と地域資料と活用する技能を養うのは必須である。その観点から、教員に必要な資質を実践的に学ぶ場として文書館を設定できないか、ということである。

こうした経緯から、専門職員の資格取得の受け皿、もしくは大学に出向いての教養講座とは異なる、社会科教員養成を主眼とした文書館・大学連携の構想が現実味を帯びることとなり、福井大学教育地域科学部・社会科教育専攻の学生が、日常的な文書館業務を体験しながら、文書館の利活用の手法を学び、社会科教員として必要な資質を身につける「学生サポータープログラム」をスタートさせるはこびとなった。この学生プログラムを実施するにあたっては、以下にあげる3つの基本目標をかかげた。

- ・将来教員となり教科指導に携わることを見据えた郷土の歴史に対する知識の習得
- ・文書館資料を中心とした地域資料を活用する能力の育成
- ・文書館等学外文化機関との連携手法の習得

この基本目標を中心に据え、学生プログラムの枠組みについて検討した。ここではっきりさせなければいけないのが、大学側での本プログラムの扱いである。この連携事業について当初は集中講義もしくは通常外の探究活動の一環となることを想定していたが、大学側の指導担当にあたる木村教授の通常の持ち授業1単位にこの学生プログラムが割り当てられることとなった。ただし週に1度の指定された90分のみ、学生が文書館へ、もしくは職員が大学に出向くということは非現実的であり、ゆとりをもって内容のあるプログラムを組むのは難しい。さらに言えば、新たに学生を受け入れることで、担当職員自身が本来の業務に支障をきたすようなことは許されない。よって、シリーズの時間配分や構成・内容については、日常の業務や学生の実情に即して、ある程度文書館側の裁量で決められることとなった。

そこで本プログラムの時間・回数を検討した。当初は、プログラム1回の時間を半日(180分)とし、これを2週間に1回の割合で全12回シリーズとする案を想定した。しかし、月に2回(全12回)行うということは、その回数分だけ準備が必要となり、日程の調整も難しくなることから、プログラム1回を1日(360分)とし、全6回シリーズとすることで落ち着いた。

シリーズの回数・時間が定まったところで、肝心なのは全6回の中身である。木村教授からは、文書館職員が日々行っている業務を学生に体験してもらうことがメインとしつつ、単なる職場体験に陥

ることなく、一連の活動を通じて学生に教員として必要な資質や歴史的教養を高める内容にすべき、との指摘をいただいた。この方針と館の業務の実態もふまえ、活動内容は業務体験、講座・講演会の聴講、文書館資料の活用実習、テーマ研究および発表の4つをベースとした。最終的に、期間は半期（6カ月）とし、4つの基本活動を組み合わせて、6回分のプログラムを組み立てた。このプログラムに先駆けて、学生に今回の企画のイメージをつかんでもらい、あらかじめ文書館という施設に慣れてもらうという名目で、半日のオリエンテーションも追加した。

こうした経緯で文書館としては設立以来初めてとなる、大学との連携事業がスタートした。この取組みは前章で詳しく報告したふくいヒストリアと同様、2年連続の実施であるが、ふくいヒストリアと異なり、1年目を終えた段階でプログラムの大枠に大幅な変更を施していない。よって、全6回のプログラム詳細については、2年分を並べて以下に述べることとする³³⁾。

(1) 2010・2011年度 文書館・福井大学教育地域科学部連携事業

「学生サポータープログラム」実践報告

①オリエンテーション

- ・日時 平成22年10月16日（土）10：00～11：30
平成23年10月16日（日）10：00～12：00
- ・場所 文書館研修室、閲覧室、各書庫
- ・活動内容 自己紹介、プログラム説明、日程調整、
館内・展示見学など
- ・参加者 福井大学教育地域科学部生および大学院生
2010年度 学部生3名、大学院生1名
2011年度 学部生4名
福井大学教育地域科学部教授 木村 亮 氏
(当館記録資料アドバイザー)
福井県文書館職員
(2011年度 武生高校教諭 島田芳秀)

表1 オリエンテーションのスケジュール

時間 ()内は2011年度	活動内容
10:00	文書館研修室集合
10:00～10:30 (10:00～10:20)	オリエンテーション① (研修室) 自己紹介・プログラム概要説明・日程調整・注意事項
10:30～11:30 (10:20～11:50)	オリエンテーション② (閲覧室・各書庫) 館の事業説明・展示説明・館内見学
11：30～	質疑応答、解散
(2011年度) 11：10～11：50	デモンストレーション ～文書館の資料を活用した授業実践例～

学生プログラムは大学の後期にあわせてスタートした。大学は9月いっぱい夏季休業で、後期は10月からとなる。そして10月の第1週で科目履修登録を行うが、この履修登録で今回のプログラムの趣旨を担当の木村教授から説明していただき、それをふまえて参加を希望した学生を集め、オリエンテーションを実施した(表1)。オリエンテーションを行った目的は主に2つある。1つは、プログラムの見通しを立てることである。履修登録で参加者が確定し、最初に集まった段階でようやく具体的な日程を調整することができる。よって、第1回のプログラムをいつ実施するかというのも、この時点で決めることとなる。

もう1つの目的は、今まで1度も来館したことのない学生に、文書館の雰囲気を感じてもらうことである。当日は、本プログラムの目的・意義、活動内容、文書館の概要について説明したあと、場所

を移動し、閲覧室で職員による展示紹介を行った。また一般の利用者は立ち入り禁止となる書庫や燻蒸室の見学も行った。学生はふだん立ち入る機会のない館の裏側を回りながら、近世の古文書、近代の新聞を間近で観察することで、文書館には何がありどんな業務を行うのかを肌で感じとることとなる。そうすることで、今後のプログラムについて大まかな活動のイメージを持つことができる。

なお2011年度は、このオリエンテーションの3日後に中学校での出前授業を控えていたこともあり³⁴⁾、そのリハーサルをかね、「文書館資料を活用した授業実践例」という名目で学生を前にデモンストレーションを行った。文書館資料を使うことで、学校現場ではこういった授業ができるということを示すため、随所に文書館資料の画像を挿入したスライドを投影し、学生も授業を受ける中学生の立場に立ち本番さながらの受け答えで模擬授業に参加してもらった。この時はちょうど出前授業の日程が近く、担当者同士の打ち合わせが大詰めをむかえていたこともあり、急きょオリエンテーションの

日程にこのデモンストレーションを組み込んだ。こちらとしては本番前に人を相手にしたりリハーサルの機会が得られるため、スライドおよび説明の分量、時間配分の確認ができる。他方、社会科の教員を志す学生にとっても、地域資料を生かした授業の1つのモデルを身をもって体験できるので、今後のシリーズでも、オリエンテーションに限らず何らかのタイミングで館の資料をとりいれた授業モデルを提示する時間を設けたい。

2時間という短い時間枠で、自己紹介から始まり、見学、説明、デモンストレーションと、学生は非常に密度の濃い時間を過ごすこととなる。初めて足を踏み入れる場所という緊張感も手伝って、日程が終わるころには学生に疲労の感がただよっていた。オリエンテーション自体はたいへん有意義であるが、次回以降もう少し内容を精査してコンパクトに行う必要があるだろう。

②前半プログラム「ふくい歴史資料にふれるⅠ～Ⅲ」

- ・日時 平成22年11月13日(土)、12月18日(土)、19日(日) 10:00~16:00
平成23年11月26日(土)、12月18日(日)、25日(日) 10:00~16:00
- ・場所 文書館研修室、閲覧室、第3書庫ほか
- ・活動内容 目録カード作成・クリーニング実習、古文書入門講座・資料検索講座の受講
県史講座業務体験・聴講、プログラム後半(テーマ研究)の概要説明

オリエンテーションから1カ月を経過した11月半ばより、いよいよ全6回のシリーズが進行する。プログラムは大きく前半と後半に分け、前半3回は「ふくい歴史資料にふれる」と題し、主に近世・近代の資料にふれる資料目録作成実習を行った。これは文書館の基幹業務の1つであり、館に寄贈



写真7 館内で展示の説明を受ける学生
(文書館閲覧室)



写真8 学生へのデモンストレーション
(文書館会議室)

または寄託の依頼により受け入れ、燻蒸処理が施された資料を1点ずつ調べ、資料目録カードを作成する内容である。学生にとっては、通常職員でなければ触れることができない資料を間近に観察できる貴重な経験となるほか、大学の講義で学んだ古文書読解の知識を生かす機会ともなる。

また、前半と後半で1回ずつ組まれているのが、業務体験と地域史学習をかねた講座・講演会の準備と聴講である。文書館が主催する年2回の県史講座（そのうちの1回分）と年1回の講演会を聴講し、会場設営・撤収、受付業務といった



写真9 「ふくいの歴史資料にふれる」活動風景（文書館書庫）

前後の仕事にも参加してもらう。文書館はこれまで30にのぼるテーマで、県内の歴史をとりあげた講座・講演会を主催してきたが、せっかくの週末にわざわざ郊外の文化施設へ足を運び、歴史的教養を深めようという地元学生の参加は期待できない。そこでこのプログラムに歴史講座を組み込むことで、歴史的教養を高める1つの機会を設けることとした。学生には会場設営や受付業務にも加わってもらい、あくまで主催者側として来館者へサービスを提供するという、社会体験の側面も加味している。

またプログラムを通じて、学生にはある程度くずし字を読みこなし、あるいはデータベースを使って調べたい事柄に即した資料検索ができる素養を身につけさせたい。そこで、上記以外にも学生向けに多少アレンジした古文書講座と資料検索講座を行った。この古文書講座は、年に1回、3回シリーズで一般の方を対象に行っている入門講座とほぼ同内容であるが、単純に変体がな・くずし字の読み方をなぞるだけでなく、学校教育での応用を意識して、随所に授業に使える資料の紹介を組み込んでいる。また資料検索講座でも、卒業論文やレポート課題で県内のある地域を調べる場合など、なるべく学生の実情に即した内容で行った。こうして前半はふるさとの歴史に直にふれることを意図し、目と耳と手を使った様々な活動を盛り込んだ。ただし、全6回の活動がそれで全てとなってしまうと、資料目録作成の合間に教養のある話を聞くだけの単純な体験活動で終わってしまい、文書館を使いこなすところまでたどりつかない。そこで、後半は学生に主体を移し、古文書の読みや、講演会・講座で得た県の歴史に関する教養、効率的な資料検索の手法といった前半で学んだ知識・技能を生かす、学生主体のテーマ研究活動を行うこととした。こうしてプログラム前半の最後に次回以降の趣旨を説明し、まず個々人で興味関心のあるテーマを2、3考えるよう指示を出して後半へのつなぎとした。

③後半プログラム「ふくいの歴史資料を広める（ふくいの歴史を資料でふりかえる）Ⅰ～Ⅲ」

・日時 平成23年1月15日（土）、2月12日（土）、13日（日）10：00～16：00

平成24年1月15日（日）、2月4日（土）、18日（土）10：00～16：00

・場所 文書館研修室、閲覧室、県立図書館

・活動内容 講演会業務・聴講、テーマ研究・報告会準備

年をまたいで後半の主な活動は、文書館・図書館の資料を活用し、学生が自ら設定したテーマについて共同で調査・研究し、後日行われる報告会にむけての準備活動を中心とした。職員がその都度趣旨を説明し、指示を出して動く前半とは異なり、後半は極力学生主導ですすめていくスタイルである。

年明け早々の第4回では、テーマ研究の趣旨と発表方法について見通しをもたせ、テーマの検討、資料の調査という順序で進めた。学生が調査研究するテーマの設定に際しては、ある程度資料の見通しが立ち、難易度が高くなりすぎないように、木村教授から適宜助言をいただきながら検討した。2カ月弱しかないスケジュールでも無理のない研究テーマということで、同時進行の連携事業（ふくいヒストリア）との兼ね合いから、2010年度は近・現代の鯖江市・旧武生市（現越前市）に範囲を絞り、2011年度は近世におこった福井の震災に焦点をあてるかたちで、テーマを設定した。



写真10 「ふくいの歴史を資料でふりかえる」活動風景（文書館閲覧室）

テーマが決定したところで、第5回そして第6回と、自治体史、文書館の複製資料（古文書・新聞）、論文など文書館・図書館資料をベースに文献調査を進めていった。ただし、後半は日程的に余裕がないことを勘案し、文書館からは学生が円滑にテーマ研究が進められるよう、関連した書籍・論文を紹介し、報告資料作成のために必要な画像データの準備や、パネル資料の作成を行った。また木村教授からも、学術的な見地からアドバイスを与えるなど適宜サポートをしていただいた。とはいえ、プログラム後半の1、2月は学生にとっては年度後期の単位取得にかかわる各種試験・レポートが課される時期にあたり、試験期間が過ぎてもなお集中講義が入るなどして、テーマ研究に本腰が入りにくい時期である。今回学生プログラムに参加した学生は、総じて学習意欲が高く、最後まで課題意識が下がることなく熱心に取り組んでいたが、それでもなお、2カ月弱の間に3回のみのも来館では、報告資料の完成に至らなかった。

こちらとしては学生が指定された日時にこだわらず、時間に余裕があれば個人で文書館に赴いてテーマ研究を進めてもらい、そうすることで今後も気軽に来館してもらう意図があった。しかしやはり上述の事情があつてか、個人での来館は期待したほどはなかった。この点については、回数を増やすか、テーマ研究活動自体も含めて後半のプログラムを一から組み直すといった修正が必要である。

結果的に、オリエンテーションと全6回のプログラムを経て、そもそも文書館の存在すら知らない地元の学生が、文書館の役割を知るところから始まり、データベースや資料を駆使してテーマ研究という1つの成果物を生み出すところまで成長した。学生にとっては、文書館が地域の歴史を後世に伝える重要な責務を持っていること、使いこなすことで教科指導の資料提供元として、連携先の文化施設として、非常に有用であることを認識できたのではないだろうか。しかしコーディネーターの側として一番こだわるのは、リピーターとしての利用である。一連のプログラムが終了し、今後も折にふれて資料を探しに来るとか、データベースを活用してレポート課題や卒業論文をこなす、といった頻度の高い使われ方がなされてはじめて文書館・大学連携の芽が出てきたことになるのである。



写真11 各回の最後に行う1分間スピーチ（文書館研修室）

なお、このプログラムは大学の講義の1つにも位置付けられているため、すべての回の最後に、学生がその日のプログラムで学んだことや所感を簡単なレポートに記入し、各回のレポート、出席状況、活動中の意欲・態度を総合的に勘案し、全体の評価を行うこととしている。また、レポート記入後に担当教授・職員、参加学生を前に、1分間スピーチを行ってその日の活動を締めくくっている。これはその日の学習を定着させるために、自身の頭の中で活動を一旦整理し、書いてさらに自分の口で相手に伝えるという学校現場ではよく行われる手法である。それを毎回体験させることも、教員養成を意識した1つの試みである。

4. 三者連携の実践例

文書館と高校、大学のシリーズ型連携事業がスタートし、それぞれ日程の半分をこなし、活動が軌道に乗っていくと、担当者としてこの2つの事業が並行したまま完結するのはもったいない、という思いにかられるようになった。文書館を媒介にふるさとの歴史を学び、外へ発信できる若い世代の育成という同じ目標を掲げた事業が同じタイミングで行われるのは、なかなかめぐってこない機会である。そこで、さらなるしかけを組むことで2本の連携を1つにまとめ、高校生と学生が共通の目的を達成する流れで両事業を完結することが理想的ではないかと考え、文書館と武生高校・福井大学教育地域学部の三者連携による特別企画を実施するにいった。

特別企画は、ふくいヒストリア・学生プログラムにおいて、高校生と学生が共通のテーマに基づいて行ってきた地域の歴史に関する調査・研究の成果を、文書館以外の場で報告するものである。前述のとおり、2010年度は近・現代の越前市・鯖江市をテーマに、武生高校でテーマ研究報告会を行った。次の2011年度は、東日本大震災をふまえてテーマを「福井の震災」とし、共同で福井県内の震災を特集する資料展示³⁵⁾をすすめていた越前市中央図書館に協力を依頼し、展示期間中の関連行事として、一般の利用者を対象としたポスターセッション「ふくいの若者は震災をどう考えたか」を行うこととした(図2)。

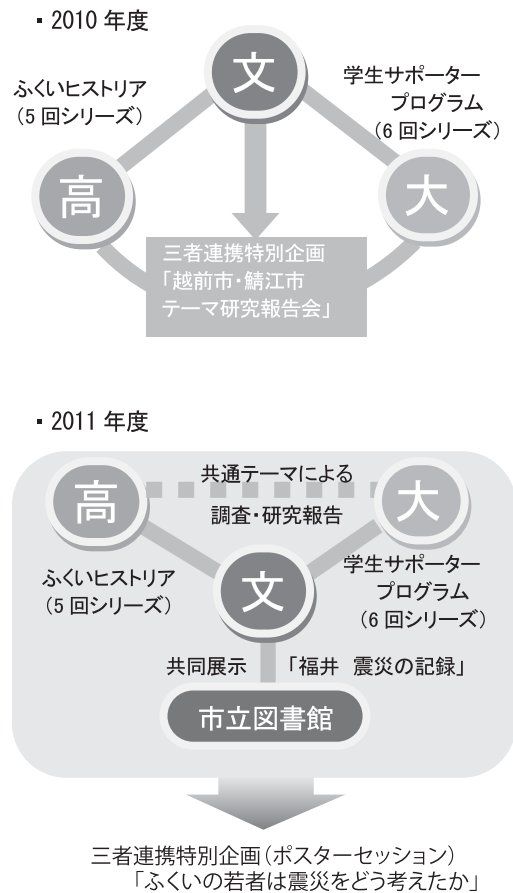


図2 三者連携のイメージ

①2010年度 三者連携特別企画

「ふるさと越前市・鯖江市テーマ研究報告会」

- ・日時 平成23年2月18日（金） 3限
1年9組 現代社会授業
- ・発表者 武生高校1年9組生徒2名
福井大学教育地域学部学生5名 計7名
- ・報告テーマ 「新聞でみる郷土の偉人 関義臣と渡辺洪基」
「武生・鯖江の鉄道史」
「入試と文集でみる武生高女」



写真12 テーマ研究報告会のようす
(武生高校食堂)

・生徒の主な感想

- 私は歴史に興味がある方ではありません。覚えることが多く、多少苦手意識があります。しかし、今日の発表を聞いて福井県にも素晴らしい人や物がたくさんあり、歴史を知ることは楽しいことだと分かりました。研究発表を聞いたことで、勉強に対し前向きに考えられるようになり、また新しい歴史のページを今日も自分の手で残しているような気がします。
- 今日の同級生や大学生の発表を聞いて、なんだかさらに福井が好きになりました。渡辺洪基という偉人が福井にいたなんて知りませんでした。今回の研究発表会は私の知らないことばかりだったので機会があれば自分から調べていきたいと思いました。
- 今回の大学生の発表を聞いて、さすが大学生だと思いました。私は人前で話すのが苦手なので、これからプレゼン能力を少しずつ身につけたいと思いました。
- 私鉄の発表で、私は私鉄の近くに住んでいるのですが、時代の変化に従って次第に姿を消していくのは残念です。町の発展につながるなら残しておいて欲しいのですが、財政的に難しいのでしょうか。

2010年度は、2月7日が福井県の誕生した「ふるさとの日」であることにちなみ、学校食堂のスペースに明治から昭和期の写真や新聞パネルを並べ、その前で高校生と大学生が20分程度、研究の成果を報告した。当日は校長・教頭先生をはじめ、各教科の先生、報道関係の記者など多くの大人たちが後ろにひかえ、食堂とはいえ普段とは違う雰囲気発表する高校生・大学生は大いに緊張していた。ただ、こうした雰囲気も手伝って、参加していた生徒は自分たちと同じ年齢の生徒と、少し上の世代である大学生の研究報告に熱心に耳を傾け、メモをとっていた。一通り報告が終わったところで質疑応答の時間を設け、最後に学生プログラムの大学側担当・木村教授からの講評をもって報告会を締めくくった。木村教授からは、地域に埋もれた歴史を発見することの面白さや、一方で資料を参照する上での確からしさについての注意点を解説していただいたが、こうして大学の先生をお招きし全体の総括をしていただくことで、この報告会自体が単なる身内のレポート報告で終わるのではなく、報告者・参加者が自身の教養を高める文化的な時間となった。

②2011年度 三者連携特別企画

ポスターセッション「ふくいの若者は震災をどう考えたか」

- ・日時 平成24年3月10日(土) 14:00~15:00
- ・発表者 武生高校図書委員(ふるさと探求グループ)8名
福井大学教育地域学部学生4名 計12名
- ・報告テーマ 「震災と復興-「武高新聞」からみる昭和23年福井震災」
「地域史料にみるふくいの震災記録」

2011年度は、当初は前年度と同様、学校ないし文書館で発表の場を設けることを想定していたが、新しいしかけとして、一般の人が集う公共施設の一角にスペースを設け、そこで研究の成果を展示しながら報告する案が浮上した。これは若い世代がふるさとの歴史に関心をもって調査・研究に取り組んでいる姿勢を広く一般に見てもらいたいという思いからである。従ってこの企画では広報用のポスターも作成し、新聞・テレビなどあらゆる媒体で広報を行った。また、前年のようなスライドを用いたプレゼンテーションにかわり、成果をまとめた報告資料をポスター大に拡大し、それを前に一般来館者に向けて説明した。成果物も越前市中央図書館と文書館の共同企画展の一資料として、2か月近くにわたりパネル展示した。



図3 「ふくいの若者は震災をどう考えたか」広報用ポスター

こうして1つの連携がきっかけとなって文書館と高校・大学間のつながりがうまれ、最後には文書館・高校・大学・市立図書館という、設置目的のまったく異なる機関がそれぞれの役割を果たしながら相互に連携する試みの実現できた。

おわりに

小・中学校向けの昔あそび体験や、巡回展示・出前授業という単発企画に頼りがちであったこれまでの普及啓発事業の反省の上に立ち、高校・大学に重心をかけて、従来とは異なる手法で連携事業に取り組んできた。文書館としては新規受入れ資料の整理、高校・大学としては、授業やレポート課題の採点、部活動・委員会指導という本来の業務を抱えながら行っている。直近の資料閲覧やレファレンスに来る生徒・学生の数を見る限りでは、かける手間と時間に見合うだけの効果がすぐ現れるほど実際は甘くない。しかし、これらの地道な取り組みを継続することによって、ゆくゆくは生徒・学生の一人ひとりの郷土愛、地元愛がはぐくまれていくのではないかと期待している。その時代の歴史が刻まれた古文書に実際に目で見て触れることは、それだけで一つの感動を呼ぶ。この感動が高校生にとっては歴史に関心を向けるきっかけとなり、教育地域科学部の学生にとっては将来教員となって歴史を教える際の自信のもととなるはずである。資料保存の兼ね合いも考えながら、こうした原本資料にふれる機会をなるべく確保し、ふるさとの歴史を身近に、肌で感じられる企画を継続したい。

また、一連の事業を担当した者として痛感したのは、広報活動の重要性である。ここに報告した様々な実践例は、規模の大小はあれども、館内・学内でとどめておくだけではもったいない。こうした活動を各種メディアで報道されることではじめて、文書館と高校・大学がそれぞれ社会へ向けて何らか

の活動を行っていることが認知される。逆にこちらから情報発信しないことには、聞き取り調査に励む高校生や地域に残された古文書を丁寧に整理する学生のがんばりは日の目を見ずに埋もれてしまう。この連携事業を通して、テレビ、ラジオ、新聞、インターネット、県および各自治体の広報などあらゆる手段を通じて広報活動を展開した。その過程では日常の業務との兼ね合いもあり、公共の文化施設としてそこまで広報活動に力を割くのは行き過ぎではないかという葛藤も生じた。ただし一方では、情報提供をこなしていくなかで、おのずと各メディアに対し、そもそも文書館がどういった施設で、どんな仕事をするとところかを説明する機会が増えたのも事実である。そして展示以外の話題でも「文書館」の名が紙面に載り、電波に流れることで、ただ暗い部屋で資料を保管している施設というイメージから脱却し、積極的に生涯教育・学校教育をサポートしている施設であるという、文書館業務の幅の広さを認知してもらうことにつながる。

この2年間の連携事業は、何よりも文書館・高校・大学それぞれが本事業の目的に賛同し、担当者が円滑に事業をすすめられるよう、内部のサポートなくしては実現できなかった。また、資料や発表の場を提供していただいた越前市立中央図書館ほか県内の各文化施設の協力も欠かすことができない。今後の三者それぞれを取り巻く環境によっては、今回の実践以上に効果的な連携事業が実現できる場合もあれば、縮小される恐れもある。ただし少なくとも「県の歴史・文化を学び、ふるさとの魅力を全国に発信できる若い世代の育成」という当初のコンセプトは今後も引き継ぎ、文書館がその基点であり続けること、そしていつしか、かつて連携事業で様々な取組みを経験した生徒・学生が、何らかの場面でふるさとの歴史を次の世代に伝えてくれることを、願ってやまない。

注

- 1) 福井県文書館は2002年(平成14)2月1日に開館したが、同年4月から1年間(平成15年度)の利用者数5,417人(開館日数294日)に対し、2010年(平成22)度の利用者数は17,066人(開館日数297日)と、およそ3.15倍の伸びを示している。『福井県文書館年報』第8号、福井県文書館、2011年。
- 2) 「Newspaper in Education (教育に新聞を)」の頭文字をとったもので、教育現場で積極的に新聞を活用しようとする考え方、試みをさす。
- 3) 福井県越前市に所在する県立高校で、全日制(普通科・理数科)と定時制、池田分校からなる。
- 4) 小学校学習指導要領 第2章各教科 第2節社会 第3指導計画の作成と内容の取扱い「指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。(1)各学校においては、地域の実態を生かし、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにするとともに、観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実を図ること。(2)博物館や郷土資料館等の施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を取り入れるようにすること。」
同第5章総合的な学習の時間 第3指導計画の作成と内容の取扱い 2(6)「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと。」
- 5) 学校教育法第31条「小学校においては、前条第一項の規定による目標の達成に資するよう、教育指導を行うに当たり、児童の体験的な学習活動、特にボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の充実を努めるものとする。この場合において、社会教育関係団体その他の関係団体及び関係機関との連携に十分配慮しなければならない。」(以下、第四十九条(中学校)、第六十二条(高等学校)に準用規定あり)
- 6) 図書館法第3条(図書館奉仕)「図書館は、図書館奉仕のため、土地の事情及び一般公衆の希望に沿い、更に学校教育を援助し、及び家庭教育の向上に資することとなるように留意し、おおむね次に掲げる事項の実施に努めなければならない。(中略)4. 他の図書館、国立国会図書館、地方公共団体の議会に附置する図書室及び学校

- に附属する図書館又は図書室と緊密に連絡し、協力し、図書館資料の相互貸借を行うこと。(中略) 8. 社会教育における学習の機会を利用して行つた学習の成果を活用して行う教育活動その他の活動の機会を提供し、及びその提供を奨励すること。9. 学校、博物館、公民館、研究所等と緊密に連絡し、協力すること。」
- 7) 博物館法第3条(博物館の事業)「博物館は、前条第1項に規定する目的を達成するため、おおむね次に掲げる事業を行う。(中略) 11. 学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関する諸施設と協力し、その活動を援助すること。」
- 同第3条2「博物館は、その事業を行うに当つては、土地の事情を考慮し、国民の実生活の向上に資し、更に学校教育を援助し得るようにも留意しなければならない。」
- 8) 前掲6) 第15条「図書館協議会の委員は、学校教育及び社会教育の関係者、家庭教育の向上に資する活動を行う者並びに学識経験のある者の中から、教育委員会が任命する。」
- 9) 公文書館法は1987年(昭和62)に成立した全7条からなる議員立法である。主な内容として、歴史資料として重要な公文書等を保存、閲覧利用、調査研究を目的とする(第4条)、設置主体は国または地方公共団体とする(第5条)といった内容にとどまる。
- 10) 福井県文書館の設置および管理に関する条例 第1条(設置)「県に関する歴史的な資料として重要な公文書、古文書その他の記録(以下「文書等」という。)を収集し、および保存し、ならびに県民の利用に供するとともに、これに関連する調査、研究等を行い、もって学術の振興および文化の向上に寄与するため、福井県文書館(以下「文書館」という。)を設置する。」
- 11) 前掲10) 第3条(業務)「文書館は、次に掲げる業務を行う。(中略) 四 文書等に関する知識の普及および啓発」
- 12) 他館における文書館資料を活用した学校連携の事例については、井上由紀恵・吉田将之「授業につかえるふくいの資料」(『福井県文書館研究紀要』第8号、福井県文書館、2011年3月)において、群馬県立文書館と埼玉県立文書館の事例を紹介した。
- 13) 島田芳秀・吉田将之「普及啓発の新しい取り組みー学校連携を中心にー」『福井県文書館研究紀要』第7号、2010年3月、87~91頁。
- 14) 前掲12)、48~51頁。
- 15) 学習院大学「アーカイブズ学専攻」は博士前期課程(定員15名)・後期課程(同3名)からなり、アーカイブズ学全般の講義のほか、主に関東地方の文書館等での2週間にわたる「アーカイブズ実習」が組まれている。
学習院大学人文科学研究科アーカイブズ学専攻 HP <http://www.gakushuin.ac.jp/univ/g-hum/arch/index.html>
- 16) このうち、公文書管理法に定められた国立公文書館に類する機能を有する施設としては、京都大学・大学文書館など6施設がある(公文書等の管理に関する法律 第1章 第2条(定義)3)。
- 17) 2011年度に小学校、2012年度に中学校で全面实施となる新学習指導要領では、小学校高学年での外国語(英語)の必修が定められ、小中学校で算数(数学)と理科の標準時間数が大幅に増加している(小学校は社会5.8%増に対し、算数16.3%増、理科15.7%増、中学校は社会18.6%増に対し、数学22.2%増、理科32.8%増)。
- 18) 2010年(平成22)12月に「希望ふくいの創造」を基本理念に掲げ、福井県がめざすおおむね10年後の将来像を描き、県民、企業、さまざまな団体、県・市町が力を合わせ、これを実現するための行動指針が策定された。
- 19) 島田芳秀『武高評論42号』福井県立武生高等学校、2011年。
- 20) 学校図書館法第4条「学校は、おおむね左の各号に掲げるような方法によつて、学校図書館を児童又は生徒及び教員の利用に供するものとする。(中略) 3. 読書会、研究会、鑑賞会、映写会、資料展示会等を行うこと。(中略) 5. 他の学校の学校図書館、図書館、博物館、公民館等と緊密に連絡し、及び協力すること。」
- 21) 前掲13) 83~84頁。
- 22) 2010年から始まった企画で、2012年は「オープン!ハイスクールライフ」と改称。学校と地域、学校と図書館をより深く結びつけることを目的に、県立図書館閲覧スペースの一角において、福井県内の高等学校の学校祭の様子や、クラブ活動にかかわる作品などを紹介する。
- 23) 福井県文書館 HP <http://www.archives.pref.fukui.jp>
- 24) 福井県立図書館 HP デジタルライブラリー http://www.library.pref.fukui.jp/kyoudo/digital_archives/top.html
- 25) 国立公文書館アジア歴史資料センター HP <http://www.jacar.go.jp>
- 26) 高等学校学習指導要領解説特別活動編 第3章 各活動・学校行事の目標と内容 第3節 学校行事「実施にあたっては、地域社会の社会教育施設等を積極的に活用するなど工夫し、十分に自然や文化などに触れられるよう配慮する。」

- 27) 福井県は白川文字学を生かした特色ある教育として、2008年（平成20）4月から県内全小学校で県教育委員会発行の副教材（漢字解説本）を使用するなど、独自の漢字教育を推進している。
- 28) 「武生高校新聞 福井震災特集号」は、当時の武生高校新聞部の生徒によって、福井震災（1948年6月28日）直後の7月20日付で発行された。罹災者の生徒氏名のほか、罹災状況などが詳しく記されている。
- 29) 1948年（昭和23）7月の新聞縮刷版、県広報課が撮影した震災アルバム、復興写真帖を紹介した。
- 30) 歴史的公文書「風致地区の一部埋立について」土木部計画課963-3、1959年（昭和34）に添付されている「復興都市計画図」。『文書館だより』第9号、福井県文書館、2007年（平成19）3月、4頁で紹介。
- 31) 高等学校新学習指導要領 第1章 言語活動の充実に関する基本的な考え方。
- 32) 福井県文書館記録資料アドバイザー。
- 33) 「学生サポータープログラム」2年分のスケジュールは以下の通りである。

・2010年度 学生サポータープログラム スケジュール表

日程	内容	場所
平成 22 年 11 月 13 日（土）	第 1 回 ふくいの歴史資料にふれるⅠ 午前 目録カード作成体験、クリーニング体験 午後 県史講座「文久3年の龍馬と福井藩」準備・聴講 講師：吉田 健氏（当館古文書調査専門員）	文書館閲覧室 県立図書館多目的ホール
12 月 18 日（土）	第 2 回 ふくいの歴史資料にふれるⅡ 午前 古文書入門講座・資料検索講座 午後 目録カード作成体験、クリーニング体験	文書館研修室 第 3 書庫
12 月 19 日（日）	第 3 回 ふくいの歴史資料にふれるⅢ 午前 目録カード作成体験、クリーニング体験 午後 後半プログラム（テーマ研究）について	文書館研修室 第 3 書庫 荷解室
平成 23 年 1 月 15 日（土）	第 4 回 ふくいの歴史資料を広めるⅠ 午前 テーマについて協議・検討、資料調査 午後 テーマ研究	文書館研修室・閲覧室 県立図書館
2 月 12 日（土）	第 5 回 ふくいの歴史資料を広めるⅡ 午前 テーマ研究・発表準備 午後 講演会「他国修行ー福井藩教育改革の軌跡ー」準備・聴講 講師：熊澤 恵里子氏（東京農業大学教授）	文書館閲覧室 県立図書館多目的ホール
2 月 13 日（日）	第 6 回 ふくいの歴史資料を広めるⅢ 午前 テーマ研究・事前リハーサル 午後 研究発表準備	文書館研修室・閲覧室 県立図書館

・2011年度 学生サポータープログラム スケジュール表

日程	内容	場所
平成 23 年 11 月 26 日（土）	第 1 回 ふくいの歴史資料にふれるⅠ 午前 資料目録カード作成実習（近世史料） 午後 県史講座「写真でみるスキー百年ーオーストリアから大野まで」 準備・聴講 講師：新井 博 氏（びわこ成蹊スポーツ大学教授）	文書館閲覧室 県立図書館多目的 ホール
12 月 18 日（日）	第 2 回 ふくいの歴史資料にふれるⅡ 午前 古文書入門講座、資料目録カード作成実習（近世史料） 午後 資料目録カード作成実習（近世史料）	文書館研修室 第 3 書庫
12 月 25 日（日）	第 3 回 ふくいの歴史資料にふれるⅢ 午前 資料目録作成実習（近代新聞資料） 午後 資料検索講座、研究発表ポスターセッションについて	文書館研修室 第 3 書庫
平成 24 年 1 月 15 日（日）	第 4 回 ふくいの歴史を資料でふりかえるⅠ 午前 テーマについて協議・検討 午後 テーマ研究資料調査	文書館研修室・閲覧室 県立図書館
2 月 4 日（土）	第 5 回 ふくいの歴史を資料でふりかえるⅡ 午前 テーマ研究資料調査 午後 講演会「記録を記録にーオーラル・ヒストリーの射程ー」準備・聴講 講師：中村 尚史 氏（東京大学社会科学研究所教授）	文書館閲覧室 県立図書館多目的 ホール
2 月 18 日（土）	第 6 回 ふくいの歴史を資料でふりかえるⅢ 午前 テーマ研究まとめ 午後 ポスターセッション資料準備・完成	文書館研修室・閲覧室 県立図書館

- 34) 2011年（平成23）10月19日、坂井市立丸岡南中学校の総合学習において、1年生4クラス、合計114人を対象に、「震災と復興」をテーマに文書館・武生高校による共同授業を実施した。これに前後する形で2～3週間の写真パネル展示も行った。こうした取り組みは、福井市春山小学校でも行っている（出前授業：2012年（平成24）1月17日、写真展示：同1月11日～1月24日）。
- 35) 平成24年越前市中央図書館・福井県文書館共同資料展示「福井 震災の記録」（2012年3月2日～4月27日開催、場所：越前市中央図書館）は、文書館開館以来初めてとなる市立図書館との共同展示である。